

終末期がん患者にみられる 「故人やあの世を見た体験」に関する研究

森田 達也*

サマリー

終末期がん患者がしばしば体験するといわれている「故人やあの世を見た体験」に関する全国調査を行った。遺族の約20%が、患者に「故人やあの世を見た体験」があったと回答した。見えていたものの内容は、亡くなった両親が最も多かった。体験に対する家族の認識はさまざまであり、約40%の家族は『自然な現象』と認識していたが、約30%は薬や病気による『幻覚』ととらえていた。患者の体験に対して医療者に希望す

るケアとして、70%以上の家族が「患者が苦しんでいたら安定剤などで苦しめないようにする」「非科学的と決めつけず、現実を受け入れて一緒に考える」ことが必要であると答えた。「故人やあの世を見た体験」に対する患者・家族の認識はさまざまであり、この現象を体験した患者・家族に対するケアにあたっては、非科学的であると一概に否定せず、個別化したアプローチが求められる。

目 的

死を前にした患者が「すでに亡くなっている人に会った・見えていた」、または、「天国・あの世・浄土を思わせる風景を見た」とする体験は、終末期患者でしばしばみられることが国際的に報告されてきた¹⁾。国内の研究でも、遺族の39%がこのような体験をしていることが示唆されている^{2,3)}。一方、終末期せん妄を体験した患者の遺族を対象とした全国調査では、「すでに亡くなっている人に会った・見えていた」ことを体験する家族があり、

20%が終末期せん妄を「あの世からお迎えが来ていることの現れだ」と意味づけしていることが報告されている^{4,5)}。しかし、これらの調査研究では対象施設は限られており、終末期患者に「故人やあの世を見た体験」がどの程度みられ、実際に家族がどのような体験をしているかの全国規模の調査はない。家族の体験の実態を知ることは、家族への適切なケアを考えるうえで必要である。

本研究の主目的は、家族の体験した終末期がん患者の「故人やあの世を見た体験」の、1) 頻度・内容、2) 家族の認識・望むケアを明らかにすることである。

*聖隷三方原病院 緩和支援診療科（研究代表者）

表 1 背景

		Total (n=2,221) N (%)	一般病棟 (n=733) N (%)	PCU (n=594) N (%)	在宅 (n=939) N (%)	P
患者						
	年齢	72.9 (12)	70.4 (12)	74.3 (11)	74.0 (12.1)	<0.001
性別	男性	1,276 (58)	431 (60)	315 (55)	530 (57)	0.15
	女性	936 (42)	284 (40)	259 (45)	393 (43)	
原発	肺	473 (21)	145 (20)	134 (23)	194 (21)	0.095
	肝・胆・膵	454 (20)	135 (19)	121 (21)	198 (22)	
	胃・食道	325 (15)	98 (14)	87 (15)	140 (15)	
	大腸・直腸	267 (12)	89 (12)	58 (10)	120 (13)	
	前立腺・腎・膀胱	163 (7.3)	47 (6.4)	43 (7.3)	73 (8.0)	
	乳腺	128 (5.8)	59 (8.0)	24 (4.0)	45 (5.1)	
	子宮・卵巣	109 (4.9)	39 (5.5)	33 (5.7)	37 (4.0)	
	頭頸部・脳	99 (4.5)	31 (4.3)	30 (5.2)	38 (4.1)	
	血液	84 (3.8)	34 (4.8)	18 (3.1)	32 (3.5)	
	その他	112 (5.0)	38 (5.3)	33 (5.7)	41 (4.5)	
年収	年収 800 万円未満	1,947 (88)	632 (93)	516 (95)	799 (92)	0.11
	800 万円以上	153 (6.9)	49 (7.2)	33 (5.0)	74 (8.5)	
居住地域	都市 (人口 30 万以上)	951 (43)	245 (38)	235 (44)	471 (57)	<0.001
	地方	1,045 (47)	402 (62)	294 (56)	349 (43)	
家族						
	年齢	61.9 (12.0)	62.1 (12.0)	61.7 (12.3)	62.0 (12.0)	0.83
性別	男性	695 (31)	258 (37)	186 (32)	237 (26)	<0.001
	女性	1,540 (69)	445 (63)	391 (68)	674 (74)	
関係	配偶者	1,151 (52)	408 (58)	267 (46)	476 (52)	<0.001
	子供	724 (33)	199 (28)	206 (36)	319 (35)	
	その他	330 (15)	103 (15)	107 (18)	120 (13)	
付添期間	4 日以上	1,916 (86)	593 (84)	466 (81)	857 (94)	<0.001
	4 日未満	282 (13)	117 (17)	112 (19)	53 (5.8)	
学歴	大学・専門学校	898 (40)	242 (35)	234 (41)	422 (47)	<0.001
	中学・高校	1,276 (58)	459 (66)	332 (59)	485 (54)	
宗教	なし	778 (35)	245 (35)	226 (40)	307 (34)	0.013
	仏教	1,248 (55)	408 (58)	306 (54)	510 (56)	
	キリスト教	43 (1.9)	5 (0.7)	12 (2.1)	26 (2.9)	
	その他	131 (5.9)	41 (5.9)	28 (4.9)	62 (6.9)	
お参り・礼拝の 頻度	定期的に・時々	1,514 (68)	494 (70)	384 (67)	636 (70)	0.34
	ほとんど・全くしない	670 (30)	212 (30)	190 (33)	268 (30)	
死んでも魂は 残ると思う	そう思う	1,509 (70)	490 (70)	372 (66)	647 (72)	0.041
	そう思わない	657 (30)	207 (30)	195 (34)	255 (28)	

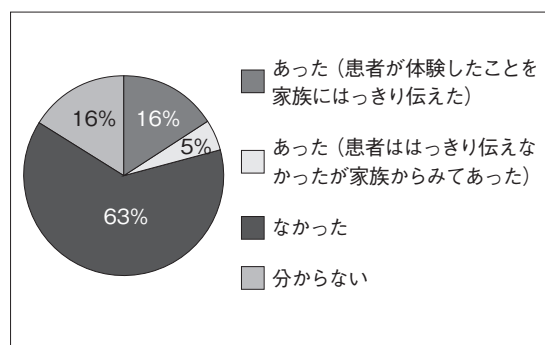


図1 故人やあの世を見た体験の有無

表2 見えていたもの

見えていた「人」	N (%)
亡くなった両親（母 177, 父 133）	310 (67)
亡くなった兄弟	113 (24)
亡くなった友人・知人	76 (16)
亡くなった子供	52 (11)
亡くなった配偶者	40 (8.6)
亡くなった親戚	20 (4.3)
ペット	8 (1.7)
亡くなった祖父母・先祖	6 (1.3)
見えていたもの、景色	
天国・あの世・浄土の風景（花畑など）	88 (19)
川・トンネル・橋などの境界	59 (13)
神・仏	45 (9.7)
光	33 (7.1)

(故人やあの世を見た体験があった、と答えた 464 名が母数)

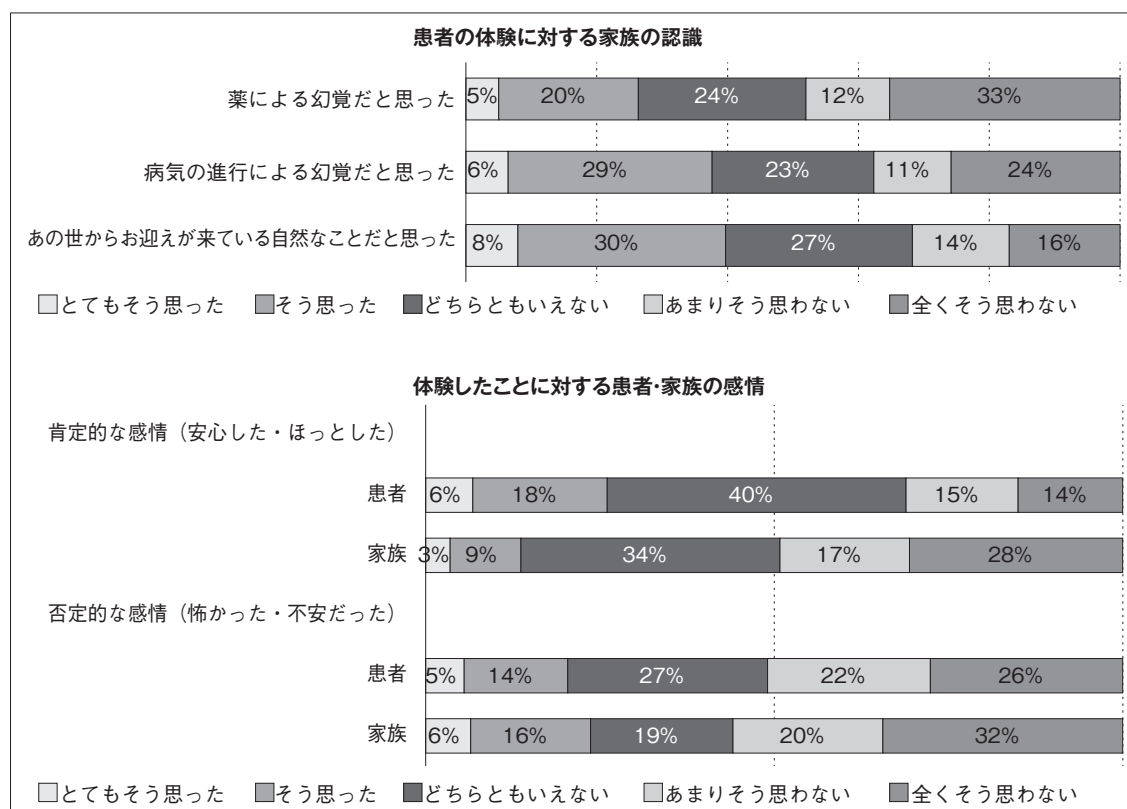


図2 故人やあの世を見た体験に対する認識・感情

結果

調査票を送付した 3,964 名の遺族のうち、2,827 名から回答を得た。このうち、有効回答 2,221 名 (78.6%) が解析対象となった。患者および遺族

の背景を表 1 に示す。

「故人やあの世を見た体験」があったと回答した家族は 464 名 (21%) であった (図 1)。患者に見えていたもののうち、最も多かったのは亡く

なった両親、次いで亡くなった兄弟であった(表2)。体験があったと答えた家族の約40%が、患者の体験を「あの世からお迎えが来ている自然のこと」とであると認識していたが、約30%の家族は「薬による幻覚」「病気の進行による幻覚」ととらえていた(図2)。体験に対する患者本人・家族の感情はさまざまであり、肯定的・否定的ないずれの感情もあった。患者の体験したことを話した相手としては、家族・知人が最も多く83%、次いで看護師20%、医師16%、ヘルパー・介護職5%、誰にも話さなかったが12%であった。患者の「故人やあの世を見た体験」に対して、医療者に希望するケアとして、70%以上の家族が「患者が苦しんでいたら安定剤などで苦しまないようにする」「非科学的と決めつけず、現実を受け入れて一緒に考える」ことが必要であると答えた。

考 察

本研究は終末期がん患者の「故人やあの世を見た体験」の実態を明らかにした、初めての全国調査である。

「故人やあの世を見た体験」は、いわゆる「お迎え現象」と呼ばれる。今回の調査で、終末期がん患者の約20%がお迎え現象を体験していることが明らかになった。お迎え現象に対する患者・

家族の認識はさまざまであり、この現象を体験した患者・家族に対するケアにあたっては、非科学的であると一概に否定せず、個別化したアプローチが求められる。

文 献

- 1) Callanan M, Kelley P. 死ぬ瞬間の言葉. 二見書房, 1993.
- 2) 森田達也, 井上 聡, 千原 明. 終末期せん妄にみられる幻覚の意味. 緩和ケアの視点から見た1考察. 臨床精神医学 1996; 25: 1361-1368.
- 3) 諸岡了介. 2011年在宅ホスピス遺族調査・〈お迎え〉体験の報告. 2010~2012年度科学研究費補助金 地域社会に見る死生観の現在に関する複合的研究.
- 4) Namba M, Morita T, Imura C, et al. Terminal delirium: families' experience. *Palliat Med* 2007; 21 (7): 587-594.
- 5) Morita T, Akechi T, Ikenaga M, et al. Terminal delirium: recommendations from bereaved families' experiences. *J Pain Symptom Manage* 2007; 34 (6): 579-589. Epub 2007 Jul 26.

〔付帯研究担当者〕

白土明美 (聖隷三方原病院 臨床検査科), 諸岡良介 (島根大学 教育学部), 相澤 出 (岡部医院研究所), 小川朝生 (国立がんセンター東病院), 河原正典 (岡部医院)